

## ICT 活用による言語教育支援展望Ⅱ

英米学科 大森 裕實

高等言語教育研究所に「CALL/ICT 部門」が設立されて本年度で 7 年目を迎えたものの、残念ながら、本部門としては最終活動の一年となった。外国語教育に対して、**Computer Assisted Language Learning** (以下 CALL) と **Information Communication Technology** (以下 ICT) を活用した学習支援がどの程度まで可能となるのか、また、そのためのツールには何が必要なのかについて継続的に検討を加え、諸活動を行なった。特に、4 年前に外国語学部で始動した「グローバル人材育成推進事業」の中核となる多言語学習センター (iCoToBa) の活動も本格化し、特に英語資格/検定支援活動と情報交換及び協調関係を保ちながら、本学における今後の「CALL/ICT 部門」がグローバル人材育成に積極的に貢献できる側面を考究する年度になったと総括することができる。

### 1. CALL & ICT 教室の整備計画——本学学務課及び多言語学習センターとの連携

本学が設置する CALL 機能を備えたデジタル方式多目的メディア教室の整備に関して、昨年度は学術情報課及び学務課が主導する形で、ネットワークの管理一元化を図ったが、実際には、H204/H205 教室の PC 及びシステムの老朽化に伴う不具合の増加が目立つ一年であった。来年度の更新に向けて助言を行ない、使用効率性の高い CALL&ICT 教室の実現を目指す。

- ① G202 教室 (旧 LL30 人教室) : PC29 台 (Win.7) と簡易型 CALL “Wingnet” (コンピュータウイング社製) の整備 (平成 23 年度に改修)。
- ② G205 教室 (旧 LL30 人教室) : PC29 台 (Win.7) と簡易型 CALL “Wingnet” [同上]
- ③ H205 教室 (旧 LL50 人教室) : PC50 台 (Win.7) と PC@LL (内田洋行製 CALL) の整備 (平成 18 年度及び平成 22 年度に改修)。音声分析ソフト Audacity 全卓完備。
- ④ H204 教室 (旧 LL50 人教室) : PC50 台 (Win.VISTA) と PC@LL (内田洋行製 CALL) の整備 (平成 21 年度に改修)。音声分析ソフト Praat 全卓完備。
- ⑤ G204 教室 (旧 LL30 人教室) : PC29 台 (Win.7) と簡易型 CALL “Wingnet” (コンピュータウイング社製) の整備 (平成 20 年度及び平成 25 年度に改修)。ネットワークブート方式 (Panasonic OSV-VHD boot) を採用し、OS 一元管理が可能なサーバー機能の向上。
- ⑥ iCoToBa (多言語学習センター) : PC14 台 (Win.7) / 貸出し Laptop PC 5 台 (Win.7) / iPad 10 台と ALC NetAcademy 及び Rosetta World (Rosetta Stone 社製) の整備  
グローバル人材育成推進事業

上掲①～⑤の CALL 教室 5 室の管理・運営に関しては、学務課担当者と本部門との緊密な意見交換のもと、円滑に行なわれており、本年 7-9 月には CALL 機種選定検討会も開催された。また、⑥に記載した多言語学習センターは別運用であるため、iCoToBa と連携した自律的外国語学習活動については協調関係を維持して、実施計画を立案する必要がある。特に、平成 28 年度末をもっていったん終了する「グローバル人材育成事業」により活性化した自律型学習支援をどのように継続・発展させるのかについて、今後綿密な検討を要す。

## 2. ICT 活性化の観点からの研究発表及びワークショップ——関連学会との連携と社会的貢献

本部門は過去 6 ヶ年度 (2009 - 2014) にわたり、大学英語教育学会 (JACET) の ICT 調査特別委員会の活動と連携して、本研究所員である Pope 教授、Watts 准教授、Cumming 准教授、Robinson 講師がいずれも本報告者と共同で研究発表を行ない、「JACET 第 2 回英語教育セミナー」(2014.12.6)においては、Panasonic 社及び HOYA 社と連携して、CALL 最新機種を利用したワークショップを企画・実施した。本年度は、「第 31 回 JACET 中部支部大会」(2015.6.20)において、袖川裕美准教授とともに、メディアによる同時通訳が英語学習者の熟達に及ぼす影響(大学英語教育への応用可能性)を視野に含めたパネルディスカッションを試みた——これらは本部門の学界及び一般社会に対する社会的貢献の一環として位置づけられる。

## 3. CALL 教室を利用した学生自主学習のススメ——語学試験対策としての H205 教室の運営

本年度は iCoToBa(多言語学習センター)の活動が定着してきたため、従来本部門が専一に担ってきた「語学試験 (TOEFL/TOEIC/IELTS) 受験のための学生自主学習」は実施を見送った。ただし、本報告者は外国語学部の TOEIC 成績データを分析し、愛知県立大学外国語学部英語教育 FD において「TOEIC®成績の現状と課題 2015」という報告を行なった (2016.2.8)。

## 4. 本学学生のニーズに適合した視聴覚教材の開発——音声学実験実習室との連携

本学部が所管する「音声学実験実習室」では“スピーチ・クリニック”を開設して、外国語(特に英語)の発音の不得意な学生や Native Speaker の自然な発音に近づきたい学生を対象とする発音矯正を課程外教育として実施しており、学長特別枠教育用資器材経費助成を受給して、PC 5 台 (Win.8 対応) を入れ替えるとともに、音声分析 Multi Speech Model 3700→5298 及び GlobalVoice CALL (HOYA 音声ソリューション事業部製) を Version Up 再導入し、リニューアルを図った——後者ソフトの特徴は、従来型の開発メーカー既製の例文ではなく、自由なコンテンツを即応的に加工できる tailor-made program にあり、音声波形、口形、口腔内図、発音評価 (アクセント・イントネーション・タイミング) を利用して、自律的学習を促すことができる点にある。今後いっそうの有機的活用が期待される。

## 5. 今後の展望

最近の言語教育において、アクティブ・ラーニング (Active Learning) と CLIL (Content and Language Integrated Learning) が脚光を浴びている。こうした動向は外国語教育に密接に関連する ICT 教育の将来を考えるうえでも重要であり、旧来の教室環境で利用する閉鎖型 CALL から、学生が on demand で自由に活用できる開放型 CALL への移行——NBLT (Network-Based Language Teaching) の推進が急務であることを示唆している。その意味では、本学情報科学部に 2015 年度から設置された Active Learning 教室 (超狭額縁デザインの高鮮明 36 面マルチビジョンを 40 台学生 PC と HDMI ケーブルで接続し、1 テーブル PC 8 台分を一体化したラジアルポールを 5 基設置) は、5 グループが同時にそれぞれ異なる情報を共有し、異なるプレゼンテーションの実行を可能にした。単一授業における多角的協調学習の活性化を導く支援科学技術の開発が手の届くところまできている。平成 28 年度から新たに開設される「通訳翻訳研究所」(Institute of Interpreting & Translation) の活動もそれを射程に含めたものである。